

英語の移動動詞の頻度

Frequency of Motion Verbs in English

小原真子

(島根大学法文学部言語文化学科)

キーワード：英語、移動動詞、頻度

1. はじめに

Talmy (1985, 1991) の移動事象に関する類型論では、何かが移動する際に使われる移動表現に関して、言語間に系統的な違いが存在すると論じられている。この類型論によると、世界の言語は大きく分けて、移動する際の経路や方向性を *go, come* などの動詞要素を用いて表す動詞枠付け言語 (**verb-framed language**) と、*into, out* などの前置詞、接辞、不変化詞など「衛星」で表す衛星枠付け言語 (**satellite-framed language**) の2つのタイプに分けることができ、英語は移動の方向を前置詞などで表す衛星枠付け言語、日本語は動詞で表す動詞枠付け言語と別々の言語タイプに属する。

これに関連して、移動動詞が移動の方向の意味を含む有方向移動動詞 (*come, go, leave, enter* など) と移動の様態の意味を含む移動様態動詞 (*walk, skip, swim* など) に大別されることが知られている (Levin 1993、上野・影山 2001)。上記の分類から分かるように、大部分の移動動詞は、方向または様態の意味のいずれか一方を内包するが、衛星枠付け言語である英語は、移動の方向を前置詞等で表すため、移動動詞自体には様態の意味が含まれることが多く、移動様態動詞の種類は日本語と比較して多い傾向にある。たとえば日本語では「歩く」という一種類の動詞しかないところに、英語では *walk* (歩く) だけでなく、*amble* (のんびり歩く)、*toddle* (よちよち歩く)、*tiptoe* (つま先で歩く) など様々な歩き方に対応した動詞が存在する。(移動表現に関する議論の詳細は上野・影山 (2001) を参照)。

上記のような日本語と英語の移動表現の違いは、小説の翻訳などに見ることができる。例として、J.K. Rowling の *Harry Potter and the Philosopher's Stone* と日本語版『ハリー・ポッターと賢者の石』の一部から、人や生き物が移動する表現を取り出していくつか比較してみよう。以下の例の下線は移動表現を示すために筆者が付したものである。まず、(1) ~ (3) は人が移動する場面である。

(1) a. Dumbledore stepped over the low garden wall and walked to the front

door. He laid Harry gently on the doorstep, took a letter out of his cloak, tucked it inside Harry's blankets and then came back to the other two.

(*Harry Potter and the Philosopher's Stone*, 17)

b. ダブルドアは庭の低い生垣をまたいで、玄関へと歩いていった。そつとハリーを戸口に置くと、マントから手紙を取り出し、ハリーをくるんだ毛布に挟み込み、二人のところに戻ってきた。

(『ハリー・ポッターと賢者の石』、28)

(2) a. 'Where's Percy?' said their mother.

'He's coming now.'

The oldest boy came striding into sight.

(*Harry Potter and the Philosopher's Stone*, 102)

b. 「パーシーはどこ？」とママが聞いた。

「こっちに歩いてくるよ」

一番年上の少年が大股で歩いてきた。

(『ハリー・ポッターと賢者の石』、144)

(3) a. He dashed back across the road, hurried up to his office, snapped at his secretary not to disturb him, seized his telephone and had almost finished dialing his home number when he changed his mind.

(*Harry Potter and the Philosopher's Stone*, 4)

b. ダーズリー氏は猛スピードで道を横切り、オフィスに駆け戻るやいなや、秘書に「誰も取り継ぐな」と命令し、ドアをピシッと閉めて電話をひつつかみ、家の番号を回しはじめた。しかし、ダイヤルし終わらないうちに気が変わった。

(『ハリー・ポッターと賢者の石』、10)

(1)、(2) の例から分かるように、英語でも、come (来る) などの有方向移動動詞が使われることがある。また、(2) の walk (歩く) のように、移動様態動詞の中でも、基本的で分かりやすい動詞も使われる。ただ、英語に特徴的なのは、細かな移動の様態の意味を含む動詞が種々あることで、(2) の stride (大またで歩く) や、(3) の dash (突進する)、hurry (急ぐ) など、どのような様子で移動したのか、細かい意味が内包されている動詞が使われることが多い。これに対して、日本語訳では「猛スピードで」、「大またで」など様子を表す修飾語によって移動様態の細かな違いを表しているのが特徴的である。

人間以外の動物の動きにはその動物に特有の動詞が使われることが多い。たとえば、(4) では、人間の移動に関しては **run** (走る) が使われているが、大へびは **slither** (滑るように進む) というへび特有の動詞が使われている。また、(5) ではふくろうが飛んでいる様子が **swoop** ((舞いおりて) 襲いかかる)、**speed** (急ぐ) という動詞で表されているが、特に **swoop** の方は鳥の移動に関して使われる動詞である。

- (4) a. The great snake was uncoiling itself rapidly, slithering out on to the floor – people throughout the reptile house screamed and started running for the exits.

(*Harry Potter and the Philosopher's Stone*, 30)

- b. 大へびは素早くとぐろを解き、ズルズルと外に這い出した。館内にいた客たちは叫び声をあげ、出口に向かって駆け出した。

(『ハリー・ポッターと賢者の石』、46)

- (5) a. He didn't see the owls swooping past in broad daylight, though people down in the street did, they pointed and gazed open-mouthed as owl after owl sped overhead.

(*Harry Potter and the Philosopher's Stone*, 9)

- b. 真っ昼間からふくろうが空を飛び交うのを、ダーズリー氏は見ないですが、道行く人はそれを目撃した。ふくろうが次から次へと飛んでゆくのを指さしては、いったいあれは何だと口をあめぐり開けて見つめていたのだ。

(『ハリー・ポッターと賢者の石』、10)

以上の例から分かるように、英語の移動動詞は数が多いため、英語学習者にとっては覚えるのが大変である。また別々の移動動詞を使うことは、日本語のように一般的な基本動詞の「歩く」を覚えてそれを汎用するという方法ではないために、新規の動詞の意味を推測するのも難しい。ハリー・ポッターのように有名な小説を原書で読もうとして、英語の動詞の多様さに挫折した覚えのある学習者も多いであろう。

多様性に富む英語の移動動詞であるが、実際どの動詞がどの程度の頻度で使用されているのであろうか。Taylor (2012) でも論じられているように、母語話者は言語要素の頻度を意識せずに知っており、このことは言語の使用にも影響を与えているものである。頻度は 'in the language' (言語の中に) 存在しているものなのである (Taylor 2012:148)。本稿は、英語の大規模コーパスを使って、

数多い英語の移動動詞の頻度の高いものから順に提示し、その傾向を観察することを目的とする。

2. 移動動詞の頻度調査

英語の移動動詞で今回調査対象としたものは、Levin (1993) と上野・影山 (2001) に移動動詞としてグループ分けされている動詞群である。2つの先行文献にある動詞群には、重複しているものが多いが、片方のみあげられているものもある。今回はどちらか一方に挙げられているものすべてを調査対象とした。頻度を調査した動詞群は、移動動詞の中でも、移動の方向を含意している有方向移動動詞 (verbs of inherently directed motion)、移動の様態を含意する移動様態動詞 (verbs of manner of motion) であるが、移動様態動詞は生物による意図的な移動の様態を表す run 動詞と、無生物に特徴的な移動の様態を表す roll 動詞の2つに下位分類される。また、上野・影山 (2001) でその振る舞いが議論されている身体運動動詞 (verbs of body-internal motion) と舞踏動詞 (waltz verbs) に関しても頻度を調査した。身体運動動詞と舞踏動詞は、(6) のように前置詞句などで表される起点や着点を付けることによって、拡張的に移動の意味を表すことができるものである。日本語訳から分かるように、日本語ではこのような方法で移動を表すことはできない。

(6) Willy {wiggled/danced} into Harriet's arms. (Jackendoff 1990: 223)

*ウィリーはハリエットの腕の中に {揺れ動いた／踊った}。

頻度調査に使用したコーパスは現代イギリス英語の大規模均衡コーパス British National Corpus (BNC) と現代アメリカ英語の大規模均衡コーパス Corpus of Contemporary American English (COCA) の2つである。BNC は1980年代から1993年までのデータを収集したコーパスで、データ量は合計1億語である。この中には1000万語の話言葉も含まれている。COCA は1990年から2019年までのアメリカ英語のデータを収集した大規模コーパスで、データ量は10億語である。2つのコーパスのデータ量に差があるため、比較する際には、100万語あたりの数値 (PMW) に換算した調整頻度を利用した (石川2012)。検索する際には、それぞれの語の動詞としての用法を活用形の違いに関わらず行った。名詞と動詞、または形容詞に同じ形が存在する語の場合 (たとえば、動詞の walk、名詞の walk など)、細かくデータを確認すると、誤って名詞の例が動詞に分類されている可能性もあるが、今回の調査では考慮に入れていない。

また、それぞれの語の重要度を確認するため、『ジーニアス英和辞典』(第5版) を使用して、中学学習語 (A ランク)、高校学習語 (B ランク)、大学生・社

会人に必要な語（C ランク）、その他の語（D ランク）を確認した。それでは、動詞群ごとに結果を確認していこう。

1) 有方向移動動詞

移動の方向の意味を含む有方向移動動詞は 26 語、このうち A ランクの動詞が arrive, climb, come, drop, enter, fall, go, leave, pass, reach, return, rise の 12 語、B ランクの動詞が approach, cross, descend, escape, flee の 5 語、C ランクの動詞は ascend, depart, exit, pierce, plunge, recede, traverse, tumble の 8 語である。このうち、調整頻度の高い順に 15 語を並べたものが次の表 1 である。なお、これらの動詞には多義のものが多く、様々な語義が存在するが、表では移動動詞の代表的な意味を 1 つだけ挙げている。

表 1 有方向移動動詞の頻度

BNC	辞書	語義	PMW	COCA	辞書	語義	PMW
1	go	A 行く	2363.13	1	go	A 行く	3545.83
2	come	A 来る	1433.22	2	come	A 来る	1801.85
3	leave	A 去る	605.78	3	leave	A 去る	622.51
4	fall	A 落ちる	258.43	4	fall	A 落ちる	229.15
5	pass	A 通り過ぎる	193.36	5	pass	A 通り過ぎる	203.02
6	reach	A 着く	220.88	6	reach	A 着く	193.67
7	return	A 戻る	213.64	7	return	A 戻る	176.81
8	drop	A 落ちる	100.21	8	drop	A 落ちる	134.21
9	enter	A 入る	136.81	9	enter	A 入る	119.13
10	rise	A 上がる	146.08	10	rise	A 上がる	109.04
11	arrive	A 着く	134.22	11	arrive	A 着く	99.83
12	cross	B 横切る	67.06	12	cross	B 横切る	61.51
13	approach	B 近づく	66.47	13	approach	B 近づく	57.60
14	climb	A 登る	53.28	14	climb	A 登る	45.26
15	escape	B 逃げる	51.35	15	escape	B 逃げる	42.48

表 1 から分かるように、有方向移動動詞の場合、BNC と COCA では多少順序に違いはあるが、同じ 15 語となっており、調整頻度はかなり高い。たとえば、一番頻度の高い go は BNC の動詞の中でも 10 番目に頻度の高い語である (Leech et al. 2001)。また、頻度の高さと連動して、辞書の重要度では、ほとんど A ランクの動詞となっている。

2) 移動様態動詞

(1) run 動詞

移動様態動詞の中でも、生物による意図的な移動を表す run 動詞は英語に多

数存在し、調査対象は 125 語である。内訳としては、A ランクの動詞が run, speed, swim, travel, walk の 5 語、B ランクの動詞が roll, rush, skip, slide, sweep, tear, troop, wander の 8 語、さらに、具体例は省略するが、C ランクの動詞が 39 語、D ランクの語が 51 語ある。このほか『ジーニアス英和辞典』に掲載されていない語が 1 語である。

これらの動詞のうち、調整頻度の高い順に 20 語並べたものが表 2 である。なお、run などは動詞として多数の意味がある多義語であり、移動様態動詞としての意味としてのみ使われているわけではない。また、一般的には移動様態動詞として使われていない動詞、たとえば、charge, file, sweep などもあるが、ここでは移動動詞としての意味を代表例として挙げてある。多義語が含まれていることから、これだけで移動動詞として頻度が高いと結論することはできないのであるが、コーパスでは意味の違いは判別できないので、便宜的に移動様態動詞の分類に含めてある。

表 2 run 動詞の頻度

BNC	辞書	語義	PMW	COCA	辞書	語義	PMW
1	run	A 走る	383.04	1	run	A 走る	465.02
2	walk	A 歩く	198.82	2	walk	A 歩く	253.65
3	fly	A 飛ぶ	85.71	3	fly	A 飛ぶ	90.21
4	travel	A さっさと歩く	84.10	4	travel	A さっさと歩く	85.45
5	charge	B 突撃する	63.68	5	roll	B 転がる	71.10
6	climb	A 登る	53.28	6	jump	A 跳ぶ	69.82
7	jump	A 跳ぶ	48.10	7	charge	B 突撃する	63.37
8	roll	B 転がる	44.38	8	file	B 列を作って行進する	50.77
9	race	A 急いで行く	34.96	9	climb	A 登る	45.26
10	rush	B 急いで行く	30.25	10	rush	B 急いで行く	37.32
11	sweep	B さっそう堂々と歩く	29.49	11	tear	B 駆ける	35.31
12	slide	B なめらかに滑る	27.98	12	slide	B なめらかに滑る	30.42
13	tear	B 駆ける	26.63	13	race	A 急いで行く	27.78
14	wander	B 歩き回る	23.06	14	hurry	A 急ぐ	26.55
15	swim	A 泳ぐ	23.02	15	swim	A 泳ぐ	24.07
16	hurry	A 急ぐ	22.91	16	sweep	B さっそう堂々と歩く	23.90
17	leap	B 跳ぶ	19.61	17	float	B 漂う	20.54
18	drift	B 漂う	18.28	18	wander	B 歩き回る	19.98
19	march	B 足早に歩く	17.18	19	skip	B 軽く跳ねながら進む	18.75
20	speed	A 急いで行く	17.11	20	speed	A 急いで行く	17.54

英語には移動様態動詞、とりわけ run 動詞の種類が多いのが特徴であるが、頻度の面から見ると、表 1 と比較して頻度が低くなっている。また、BNC、COCA とも A ランクの動詞が 10 個、B ランクの動詞が 10 個となっており、有方向移動動詞と比べると重要度が低い動詞が多くなっている。

(2) roll 動詞

次に、移動様態動詞の中でも無生物に関わる移動の様態を表す roll 動詞 21 語の頻度を確認しよう。語の内訳は、A ランクの語が drop, move, turn の 3 語、B ランクの動詞が bound, drift, float, revolve, roll, slide, slip, spin, swing, twist, wind の 11 語、C ランクの語が bounce, coil, glide, rotate, whirl の 5 語、D ランクの語が meander, twirl の 2 語である。このうち、調整頻度の高い順に 15 語並べたものが表 3 である。

表 3 roll 動詞の頻度

BNC	辞書	語義	PMW	COCA	辞書	語義	PMW
1	turn	A 回る	434.41	1	turn	A 回る	477.63
2	move	A 移動する、動く	372.90	2	move	A 移動する、動く	430.18
3	drop	A 落ちる	100.21	3	drop	A 落ちる	134.21
4	slip	B 滑る	46.67	4	roll	B 転がる	71.10
5	roll	B 転がる	44.38	5	slip	B 滑る	41.65
6	swing	B 揺れ動く	31.77	6	slide	B なめらかに滑る	30.42
7	slide	B なめらかに滑る	27.98	7	swing	B 揺れ動く	27.99
8	wind	B 曲がる	22.11	8	spin	B 回る	27.19
9	drift	B 漂う	18.28	9	wind	B 曲がる	26.18
10	twist	B ねじる	17.57	10	float	B 漂う	20.54
11	spin	B 回る	17.10	11	twist	B ねじる	16.27
12	float	B 漂う	17.08	12	bounce	C はずむ	15.79
13	bounce	C はずむ	11.67	13	drift	B 漂う	14.94
14	rotate	C 回転させる	6.84	14	rotate	C 回転させる	9.19
15	bound	B はずむ	4.87	15	revolve	B 回転する	5.76

表 3 から分かるように、これらの動詞も、有方向移動動詞と比較すると低頻度である。表 2、表 3 の run 動詞、roll 動詞の頻度から、英語は移動様態動詞の種類は多いものの、一つ一つの動詞の頻度は高くないことが分かる。また、roll 動詞の場合、15 語の中では、BNC と COCA で順序に違いはあるものの、A ランクの語が 3 語、B ランクが 10 語、C ランクの語が 2 語となっており、頻度と連動して重要度も低くなる傾向にある。

3) 身体運動動詞・舞踏動詞

最後に身体運動動詞 15 語、舞踏動詞 20 語の頻度を確認しよう。Levin

(1993) が挙げている身体運動動詞のうち、A ランクの動詞は kick 1 語のみであるが、上野・影山 (2001) はこの動詞を身体運動動詞に含めていない。B ランクの動詞は rock 1 語、C ランクの動詞は fidget, flap, sway の 3 語、D ランクの動詞が 10 語である。これらの身体運動動詞の調整頻度が高い順に 10 語あげたものが表 4 である。

表 4 身体運動動詞の頻度

BNC	辞書	語義	PMW	COCA	辞書	語義	PMW		
1	kick	A	足をけるように動かす	34.17	1	kick	A	足をけるように動かす	59.31
2	rock	B	揺れ動く	9.48	2	rock	B	揺れ動く	16.44
3	sway	C	揺れる	7.58	3	sway	C	揺れる	8.01
4	flap	C	バタバタ動かす	4.85	4	flap	C	バタバタ動かす	4.08
5	twitch	D	びくびく動かす	4.55	5	twitch	D	びくびく動かす	3.52
6	wriggle	D	体をくねらせる	4.43	6	wiggle	D	びくびく小刻みに動かす	2.76
7	wobble	D	ふらつく	2.19	7	squirm	D	身をよじる	2.67
8	squirm	D	身をよじる	1.98	8	teeter	D	ぐらつく	2.21
9	buck	D	背を曲げてはねあがる	1.75	9	buck	D	背を曲げてはねあがる	2.01
10	fidget	C	そわそわする	1.63	10	wobble	D	ふらつく	1.90

表 4 から分かるように、身体運動動詞は kick 以外の動詞は頻度がかなり低く、また語の重要度も低い。

舞踏動詞は、A ランクが dance 1 語のみ、B ランクの動詞は 0 語、C ランクが clog, shuffle, waltz の 3 語、D ランクの動詞が 16 語である。表 5 に舞踏動詞の調整頻度の高い順に 5 語を並べているが、他の動詞グループと比較しても、かなり頻度が低いのが分かる。

表 5 舞踏動詞の頻度

BNC	辞書	語義	PMW	COCA	辞書	語義	PMW		
1	dance	A	ダンスをする、踊る	32.11	1	dance	A	ダンスをする、踊る	45.69
2	shuffle	C	足をもぞもぞ動かす	5.17	2	shuffle	C	足をもぞもぞ動かす	4.65
3	clog	C	木靴ダンスを踊る	2.50	3	clog	C	木靴ダンスを踊る	3.25
4	boogie	D	ブギウギを踊る	0.48	4	waltz	C	ワルツを踊る	1.20
5	bop	D	ポップ音楽にあわせて踊る	0.35	5	bop	D	ポップ音楽にあわせて踊る	0.57

舞踏動詞の場合、動詞としての意味が「特定の種類のダンスを踊る」という意味であることが多く、多義語としての意味の広がりが見られない。特定の場面では使わないことが頻度が低くなっていることの一因であろう。

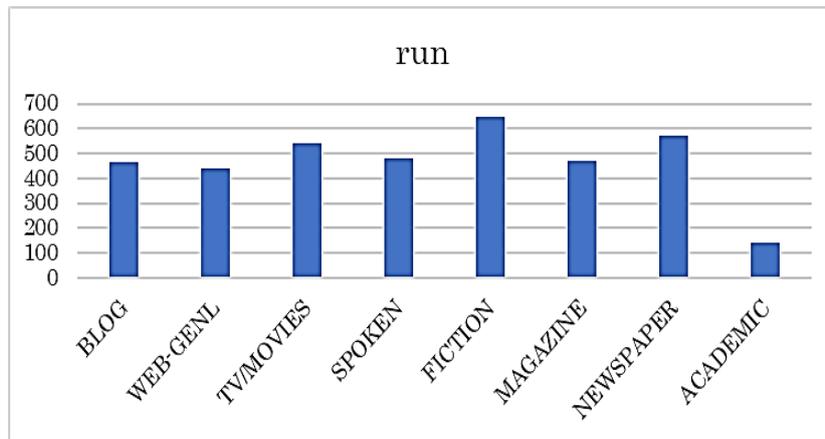
5) ジャンル別頻度

なぜ移動動詞の中でも頻度の高い動詞と低い動詞があるのでしょうか。一つの可能性として、ジャンル別の頻度に違いがあることが考えられる。本来はすべての語に関してジャンル別の頻度を調査すべきであるが、今回は試みに COCA でいくつかの動詞のジャンル別の 100 万語ごとの調整頻度をグラフに表した。COCA では下位ジャンルごとのデータ量がほぼ同じであるので、ジャンルごとの頻度を比較するのに適していると言える。

移動様態動詞 run 動詞の中でも一番頻度の高い run、それほど頻度の高くない hurry をそれぞれグラフに表すと、図 1、図 2 のようになる。図 1 にあるように、run の場合は学術 (ACADEMIC) の頻度が低い以外は、ジャンルに関わ

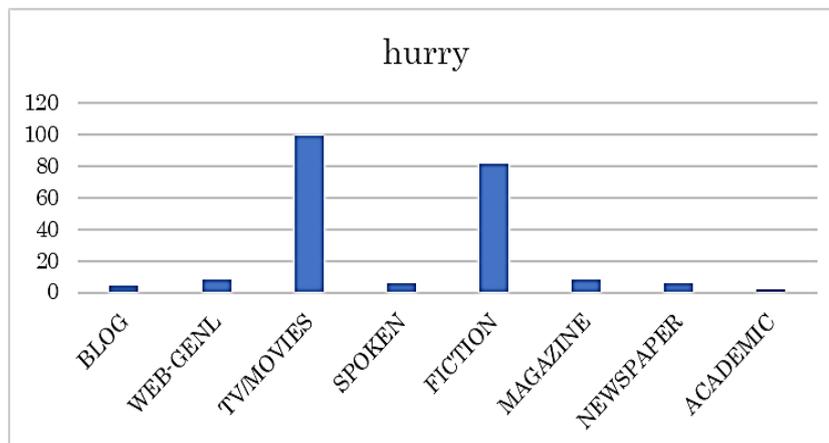
りなく使用される傾向にある。

図1 run ジャンル別頻度



これに対して、run 動詞の中でも高頻度ではない hurry では、図2のように、テレビ／映画（TV/MOVIES）と小説（FICTION）の頻度が他のジャンルに比べて極端に高くなっており、分布に偏りが見られる。語によって偏りに違いはあるものの、細かい様態を含意する低頻度の移動様態動詞は小説や映画などで比較的多く使用される傾向にあることを示唆している。

図2 hurry ジャンル別頻度



3. おわりに

本稿では、移動動詞のグループごとに、主な動詞の頻度を BNC と COCA の 2 種類のコーパスで確認し提示した。英語では有方向移動動詞と移動様態動詞のうち後者の種類が多いのが特徴であるが、今回はそれぞれの動詞の頻度から移動動詞を観察した。その結果、確かに移動様態動詞の種類が多いものの、一つ一つの語の頻度の方から見てみると、英語でも有方向移動動詞が使われる頻度の方がは

るかに高いことが判明した。このことは、移動動詞の類型を論ずる際に頻度も考慮に入れる必要があることを示唆している。

【参考文献】

- 石川 慎一郎. 2012. 『ベーシックコーパス言語学』 ひつじ書房.
- Jackendoff, Ray. 1990. *Semantic structures*. Cambridge, MIT Press.
- Leech, Geoffrey, Paul Rayson and Andrew Wilson. 2001. *Word frequencies in written and spoken English: Based on the British national corpus*. Longman.
- Levin, Beth. 1993. *English verb classes and alternations*. Chicago University Press.
- Talmy, Leonard. 1985. Lexicalization patterns: Semantic structure in lexical forms. In *Language typology and syntactic description Vol. III: Grammatical categories and the lexicon*, ed. Timothy Shopen, 57-149. Cambridge University Press.
- Talmy, Leonard. 1991. Path to realization: A typology of event conflation. *BLS* 17: 480-519.
- Taylor, John R. 2012. *The mental corpus: How language is represented in the mind*. Oxford University Press.
- 上野 誠司・影山 太郎. 2001. 「移動と経路の表現」影山 太郎（編）『日英対照動詞の意味と構文』 40-68. 大修館書店.

辞書

『ジーニアス英和辞典』（第5版）2014. 大修館書店

小説

- J.K. Rowling. 1997. *Harry Potter and the Philosopher's Stone*. Bloomsbury Publishing.
- J・K・ローリング. 1999. 『ハリー・ポッターと賢者の石』松岡 佑子（訳） 静山社.

コーパス

British National Corpus (<https://www.english-corpora.org/bnc/>)

Corpus of Contemporary American English (<https://www.english-corpora.org/coca/>)